

貝殻集積からみた 先史時代の貝交易の復元

ゴホウラ・イモガイ集積の分析

Redrawing of Prehistoric "Shell Trade" Based on the Archaeological Analysis
of Shell Deposits in Okinawa : Analysis of Shell Deposits
of Gohora (*Strombus latissimus*) and Imogai (*Conus* spp.)

島袋春美

SHIMABUKURO Harumi

はじめに

①研究略史

②分析の方法

③分析の結果

④貝交易の時期別動向

⑤結語

【論文要旨】

弥生時代前期から古墳時代にかけて沖縄諸島と九州及び近畿との先史貝交易について、供給地側の有り様を具体的にさぐるため、貝殻集積の分析を行った。加工の施されたゴホウラ類は提示されている素材・粗加工品に分類し、イモガイ類集積は大きさを計測し、大きさの度数分布を類型化した。また、消費地のイモガイ腕輪の大きさをイモガイ類集積の大きさの基準とした。さらに、貝殻集積の集積個数や組成、貝質などを含めて、貝殻集積の残存状態を分類した。貝殻を集めた段階、貝殻を選別した段階、貝殻の選別途中の段階、貝殻の選別後の段階に分類される。前3者は交易前、後者の選別後の段階が交易後の集積と推定される。

時代ごとにみると弥生前期前葉～中葉併行期は貝交易の開始期で、ゴホウラの大原型素材の集積で、貝殻を選別した段階、イモガイ腕輪の大きさを満たすイモガイ類集積が確認された。弥生前期後葉～中期中葉併行期は貝交易が北部九州に広がる。ゴホウラの素材・粗加工品の生産が供給地の沖縄に移る。ゴホウラの子座間味型素材の集積が嘉門貝塚で多数確認されている。若貝が主体で、集積個数が少なく、貝殻の選別後の段階である。弥生中期後葉併行期は貝交易のピークとされている。貝殻集積の数は少ないが交易前の集積である。逆に、選別後の段階の集積がなく、貝殻を効率よく交易していたことが窺える。弥生中期末～後期中葉併行期は弥生貝交易が終焉に向かう時期である。イモガイ類集積には集積個数が多く、イモガイ腕輪の大きさを満たすものが複数確認されている。貝殻を集めた段階の集積で、取り引きされなかったことが明らかにされた。古墳前期～中期は古墳貝交易が再開された。ゴホウラの背面貝輪粗加工品の集積は貝殻を選別した段階である。イモガイ類集積は大型のイモガイが抜き取られるが、集積個数も多く、貝殻の選別途中の段階である。古墳後期はイモガイ腕輪より小型のイモガイ類集積が確認された。貝輪以外の製品の可能性が推定され、度数分布の類型から、貝殻を集めた段階と選別後の集積に分かれる。

以上、7時期に区分された先史貝交易の変遷を貝殻集積の分析によって、より具体的に示すことができた。
【キーワード】ゴホウラ素材・粗加工品、イモガイ類の大きさ、度数分布の類型、残存状態